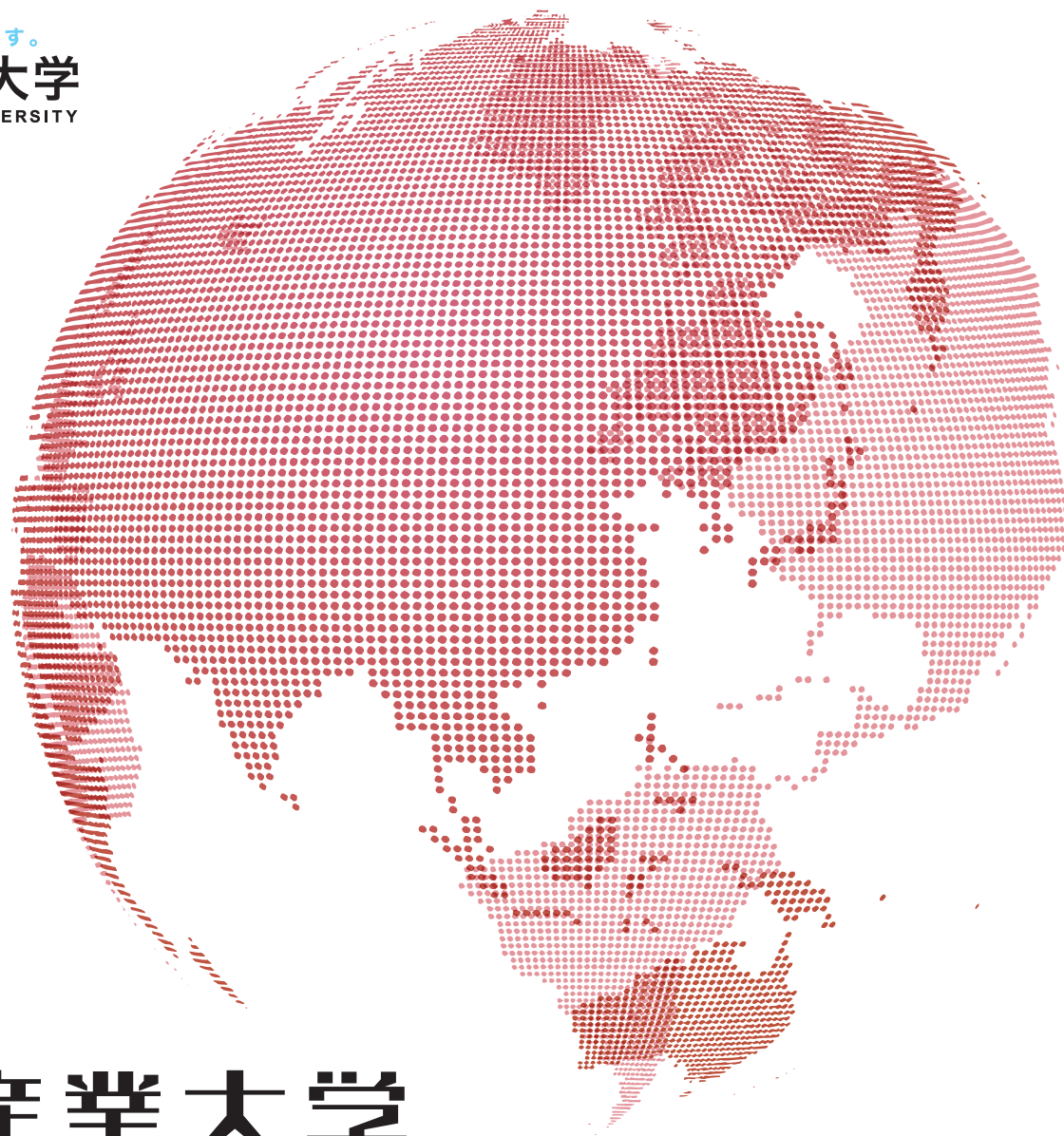




京都産業大学 世界問題研究所 ニュースレター

2024. 7 Vol.12

NEWS LETTER

CONTENTS

特集

2023 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

2

所長挨拶

4

講評

6

若泉敬記念基金について

11

【特集】

2023 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

京都産業大学世界問題研究所主催の 2023 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式が、2024 年 3 月 13 日（水）にオンライン方式で開催されました。世界問題研究所の所員や関係者、懸賞論文の入賞者

など 15 名が参加しました。

「若泉敬記念基金」懸賞論文は、長年にわたって世界問題研究所所長を務めた故 若泉 敬 教授の寄付をもとに設置された「若泉敬記念基金」の活動の一環として実施されています。本学の学生を対象に「今日の世界問題に関するテーマを各自で設定し、副題

2023 年度 世界問題研究所「若泉敬記念基金」懸賞論文 入選者

（区分ごとに氏名の 50 音順）

二 席	
佐藤 凜太郎さん (現代社会学部・4 年次)	「震災復興過程についての全国向けマスメディアの姿勢・方法の研究——『寄り添う報道』の必要性」
中澤 柚葉さん (国際関係学部・4 年次)	「持続可能な観光業の実現—評価の為に指標の提案—」
佳 作	
池田 遼真さん (国際関係学部・4 年次)	「日本の再生可能エネルギー普及とその市場構造に関する研究：送配電市場における癒着と出力抑制ルールを事例に」
井村 安里さん (国際関係学部・3 年次)	「森林減少対策としての貧困撲滅 インドネシアにおける REDD + 成功に向けて」
佐藤 美宇さん (国際関係学部・4 年次)	「グローバル課題と『食』～環境、福祉、多様性から考える～」
鹿野 海人さん (法学部・4 年次)	「今日の世界問題 国家間紛争による地域利益損失を回避するための自治体による予防外交についての考察」
南 優希さん (国際関係学部・3 年次)	「使い捨てプラスチックが海洋に与える影響～循環型社会の実現に向けたプライベート・ガバナンス協働の在り方～」
山口 和華さん (国際関係学部・4 年次)	「開発援助とグローバル・ガバナンス：誰のためのグローバル・ガバナンスなのか？」
吉野 百香さん (国際関係学部・4 年次)	「ドイツの初等教育科目 Sachkunde からみる環境教育の在り方」

※一席の該当者なし

をつけて論じる」という趣旨で論文を募集したところ、第21回目にあたる本年度は1年次生から4年次生まで過去最多の21篇の応募作があり、二席2篇・佳作7篇の計9篇が入賞しました（一席は該当なし）。

表彰式では世界問題研究所所員の耳野 健二 現代社会学部教授が司会進行を務めるなか、所長の岩本 誠吾 法学部教授から「今回応募された懸賞論文は、まさに、若泉先生が推奨されています『読み、書き、考える』を实践した成果物であり、若泉先生のお言葉を借りれば、『言語能力を涵養し、想像力と創造性を開発し、精神的貧困を克服する』ことにも繋がります」「学生の皆さんは、懸賞論文に応募するために一生懸命に勉強されたことと思います。この素晴らしい経験を忘れることなく、引き続き、深く思考をめぐらし文化創造の实践をこれからも続けていくことを祈念」しています、と所長挨拶がありました。そして、岩本所長から参加した入賞者一人一人に賞状が授与されました。

その後、入賞作の講評に移りました。まず岩本所長から「今回は、1年生の学生さんが、それも2名応募されました。また、2年連続で応募された学

生さんもいらっしゃいます。主催者側として、果敢に挑戦してくれた多くの学生さんの熱意に感謝するとともに、高く評価したいと思います」「どれ一つ同じテーマはなく、どれも非常に重大でかつ多彩なものでした。将来を生きる現代の学生さんは、どんな問題が気になっているのか、未来社会を考える上で非常に興味深く感じました。今後とも、多様な世界問題に興味関心を持ち続けて、その解決方法を考え続けてほしいと痛感しました」との全体講評がありました。

つづいて、二席の2篇について、所員の久保 秀雄 法学部教授から、論文の内容の紹介とともに、どのような点が高い評価を得たのか、詳しい講評がありました。また、佳作の7篇については、所員の中谷 真憲 法学部教授から、優れた点とさらなる研鑽を期待する点について、個別に講評が行われました。

そして、来賓である世界問題研究会 INC（インターネットクラブ）幹事の木野 正博氏から、1966年に創立され2001年まで存続した学生団体である世界問題研究会の活動内容等についてご紹介があるとともに、「卒業後、商社に勤務し、石油・エネルギー



部門での業務に従事してきましたが、学生時代に学んだ世界情勢を視る目や、国際感覚というものが仕事に大いに役立ってきました」「培った問題意識やロジカルな分析・研究のアプローチ・手法は、これからの皆さんの人生の中で、きっと役立つものになってくると思います」と祝辞を頂戴しました。

講評の後には、入賞者一人一人から執筆時の苦労や受賞の喜びなどが語られました。入賞者からは「ゼミの先生や同級生がアドバイスをしてくれたおかげで考えが深まった」「あまり注目されていないテーマなので独自性を出すことができた。これからも研究を深めたい」「インタビューや実地調査で多くの人にご協力して頂いたおかげで研究を進められたので、感謝したい」「どうまとめるか苦労したが、何度も書き直して、ようやく仕上げることができた」「今回の研究を発展させて卒業論文を執筆する予定なので、来年も挑戦したい」「研究した内容を4月からの就職先でも活かしていきたい」「自分の大学生活の集大成になった」「ドイツ語でインタビューを実施するのが難しかったが、自分ができる分かなりやすいドイツ語で実施したのでインタビューにも理解しやすく話をしてもらうことができた」といった声などが、寄せられました。

最後に、来賓として参加した鍵本 優 現代社会学部教授から、「ゼミで進めてきた佐藤凜太郎さんの研究が評価されて、私どもも大変喜んでおります。佐藤さんは随分苦労しながら内容を詰めていかれましたが、学生時代ならではの経験で、ゼミで一つ一つコメントをもらって吟味しながら論文の執筆を進めることができていました」とのコメントを頂戴しました。

所長挨拶

第21回「若泉敬記念基金」懸賞論文授賞式の開催に当たり、懸賞論文の趣旨を簡単に説明し、学生の皆さんに受賞の意義・意味について再確認していただきたいと思います。

この懸賞論文の趣旨は、二つあります。一つは、どの学部生の皆さんからでも懸賞論文に応募ができるように、「今日の世界問題について」という幅広い主題を設けて数多くの論文を募り、その応募作の中から優秀作を選考し奨学金を授与することで、応募してくれた学生の学業増進の励みにしてもらうことです。

もう一つは、優秀作に与えられる奨学金の元である「若泉敬記念基金」という名称が示す通り、本学教授でいらしゃった若泉敬先生のご功績を記念することです。

若泉敬先生は、1966年に本学に教授として着任され、1970年12月から1980年4月までの約10年間にわたり第2代世界問題研究所長を務められました。1992年の退職時には、退職金の全額を本学に寄付され、それが「若泉敬記念基金」となったわけです。

若泉先生のご功績は、ご著書「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」が有名ですが、佐藤栄作首相の密使として沖縄返還交渉にご尽力されただけでなく、本学創設当初から本学の発展に尽力された大功労者の一人です。

若泉先生は、文化の日にちなみ1984年11月3日付の地元新聞「日刊福井」に「読もう、書こう、考えよう」というエッセイを書かれています。「本を読み、文章を書き、心田（しんでん）を耕す（＝考える）」ことの大切さを指摘されています。

今回応募された懸賞論文は、まさに、若泉先生

が推奨されています「読み、書き、考える」を実践した成果物であり、若泉先生のお言葉を借りれば、「言語能力を涵養し、想像力と創造性を開発し、精神的貧困を克服する」ことにも繋がります。

今回も、世界問題研究所と同年の1966年に設立された学生団体「世界問題研究会」のOB幹事で、学生の皆さんの50年以上先輩の本学5期生の木野正博様に、オンラインで授賞式に参加していただいています。当時の世界問題研究会の学生さんは、直接、若泉敬先生の薫陶も受け、皆さんと同様に、真っ向から世界問題に取り組み、広く関連文献を読み漁り、真剣に論文を書かれていました。

世界問題研究会の諸先輩方が卒業後に様々な領

域でご活躍されていることからわかるように、学生時代に真剣に「読み・書き・考える」体験は、卒業後の社会人としても大いなる糧や励みになったことでしょう。後に、木野様には、学生時代に論文を書かれた大先輩として、一言、ご祝辞をいただければ幸いです。

学生の皆さんは、懸賞論文に応募するために一生懸命に勉強されたことと思います。この素晴らしい経験を忘れることなく、引き続き、深く思考をめぐらし文化創造の実践をこれからも続けていくことを祈念し、私の開会の挨拶といたします。

世界問題研究所長 岩本 誠吾



講評

〈全体講評〉

第21回目の懸賞論文に当たる今回は、国際関係学部、現代社会学部、文化学部そして法学部の4学部から過去最高の21篇の応募作がありました。さらに、従来であれば、応募される学生さんの学年も3年生と4年生に限られていましたが、今回は、1年生の学生さんが、それも2名応募されました。また、2年連続で応募された学生さんもいらっしゃいます。主催者側として、果敢に挑戦してくれた多くの学生さんの熱意に感謝するとともに、高く評価したいと思います。

そして、「今日の世界問題」と題して応募された論文は、どれ一つ同じテーマはなく、どれも非常に重大でかつ多彩なものでした。将来を生きる現代の学生さんは、どんな問題が気になっているのか、未来社会を考える上で非常に興味深く感じました。今後とも、多様な世界問題に興味関心を持ち続けて、その解決方法を考え続けてほしいと痛感しました。

これら21篇は、着眼点、論文構成、分析方法など、どれも学術的レベルの高い論文でありました。そのため、甲乙付け難かったですが、審査の結果、二席に2篇、佳作に7篇が選ばれました。これら9篇については、後ほど個別に講評されます。なお、残念ながら入選されなかった12篇も非常に素晴らしい論文であったので、何らかの形で学生さんの名前と論文名をご紹介します。

受賞者の皆さん、おめでとうございます。これからも勉学に頑張ってください。

〈受賞作講評〉

■二席

現代社会学部現代社会学科4年次

佐藤 凜太郎

「震災復興過程についての全国向けマスメディアの姿勢・方法の研究——『寄り添う報道』の必要性」

本論文は、東日本大震災からの復興に関して、被災者たちの「心の復興」をめざすために「寄り添う報道」が必要であるとの考えから、被災地メディアと全国メディアを比較しながら、震災報道の紙面分析等を行っている。そして、被災地メディアが地域に密着して小さな事実や被災者の心の葛藤をありのまま報道しているのに対して、全国メディアが第三者的な視点から様々な数字を並べていたり全国の人々に分かりやすく伝えるためストーリーをテンプレート化していたりすることを、それぞれの背景要因にまで踏み込んで明らかにしている。その上で、被災者に「寄り添う報道」を実現するためには、全国メディアも被災した当事者の視点をもっと取り入れる必要があるとの提言を行っている。

本論文に関しては、比較を通して震災報道の課題とあるべき方向性を丁寧に解明していく手堅さが特に優れた点である。また、被災地メディアに触れる経験がない人間には様々な気づきを与えインパクトも大きい点が高く評価された。

■二席

国際関係学部国際関係学科4年次

中澤 柚葉

「持続可能な観光業の実現—評価の為に指標の提案—」

本論文は、持続可能な観光業の実現を後押しするため、複数存在する既存のガイドラインを分析して必要不可欠な要素を抽出し、その上で網羅性のある評価指標を自ら作成して、既存のガイドラインの具体化を図っている。そして、日本の先進事例として国際的にも高い評価を得ている岩手県釜石市に自らが作成した指標を適用し、何が達成できていて何が不足しているのかを洗い出しながら現在の進捗状況を明らかにしている。

本論文に関しては、評価のための指標を自分で作成し、それを実際に用いて先進事例を評価してみせるというユニークな取り組みを行っている点が秀逸である。また、自作の指標がどのように有効であるのかを具体的に示す一方で、目に見えない要素の数値化をどうするのかといった課題が残されていることを自覚して明示しており、可能性と限界を見極

めようとするバランス感覚を備えていることも高く評価された。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

池田 遼真

「日本の再生可能エネルギー普及とその市場構造に関する研究：送配電市場における癒着と出力抑制ルールを事例に」

日本の再生可能エネルギー普及率の低さの理由を「送配電段階の電力市場構造」に着目して考察した好論文。完全自由化がなされた発電／売電（小売り）市場に比べ、これまで送配電市場への注目は低かったが、その市場構造が電力の安定供給にこだわるあまり、「法的分離による分社化」にとどまっていることが新規事業者の参入障壁となっている、という点



をドイツと比較し明確に論じている。国内外の文献や情報を用い、秋田洋上風力発電株式会社へのインタビューも行うなどリサーチ力も高い。せっかくのインタビューをより活かしていればなお良かった。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次

井村 安里

「森林減少対策としての貧困撲滅 インドネシアにおける REDD + 成功に向けて」

開発途上国の森林に関し、伐採ではなく保全の経済的インセンティブを考える「REDD +」を実際に機能させるための条件を、インドネシアを事例として考察した論文。先行研究に基づけば森林減少の抑制には貧困削減への取り組みが重要だが、本論文ではインドネシア独特の貧困問題の構造分析に基づいて、移住民や地域住民が森林管理に参加する「社会林業」と「REDD + を利用した CO2 削減に対する報償支払いの仕組み」の組み合わせを解決策として提示する。総論として説得的で魅力ある考察である。政策案としてはもう一段の踏み込みがあればなお良かった。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

佐藤 美宇

「グローバル課題と『食』～環境、福祉、多様性から考える～」

食を巡るグローバルな課題を「畜産業が与える環境負荷」「動物福祉」「食の文化的多様性と消費者への多様性の配慮」の三分野に分け、それぞれについて国際社会の動向や先進例と日本の現状を突き合わせることで、日本が取り組むべき事柄を明確にしようとした論考。論考全体を通して論理と提言は非

常に分かりやすく、国際規範に形式的に賛同しながらも具体策についてはやや後ろ向きのところが多い日本の対応の問題点が説得的に伝わってくる。全体が簡潔明瞭な分、一つの分野に絞って掘り下げていれば独創性という点ではさらに深みのある論考になったと思われる。

■佳作

法学部法政策学科 4 年次

鹿野 海人

「今日の世界問題 国家間紛争による地域利益損失を回避するための自治体による予防外交についての考察」

外交は通常は国家の専管事項とされるが、実際には国際交流を超えたレベルの外交的活動には国内外に多くの事例があり「自治体外交」に関する先行研究も存在する。本論文ではそれらの知見の上に自治体としての予防外交の展開可能性を論じている。その手段としては「相互信頼関係の増進」「開発協力の実施」「紛争予防の知識の育成」「国際世論の喚起」「経済外交」をあげ、堅実で多様な考察を加えるとともに、法的根拠や国家外交との齟齬の問題など課題面についても目配りよく論じている。字数内への縮約の苦勞から、やや整理しきれなかった点が惜しまれる。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次

南 優希

「使い捨てプラスチックが海洋に与える影響～循環型社会の実現に向けたプライベート・ガバナンス協働の在り方～」

海洋プラスチックごみ問題について、政府を主体とするパブリック・ガバナンスだけでなく、企業

などが参加するプライベート・ガバナンスでの協働に着目して解決への糸口を探ろうとする論考。プラスチックごみの環境問題と輸出入の現状を概観したのちに、EU、ASEAN、日本の政策動向を紹介している。中でも生産者が生産物の廃棄後まで一定の責任を負うEPR（拡大生産者責任）の有用性を提唱している。政策面の紹介に紙幅が割かれたため私的アクターの取組についての考察がやや物足りないが、亀岡市でのインタビュー実施など意欲的な調査に敬意を表したい。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

山口 和華

「開発援助とグローバル・ガバナンス：誰のためのグローバル・ガバナンスなのか？」

開発援助のロジック自体が先進国側の視点の押し付けであり世界経済秩序の形成や維持のためではないのか、という問題意識に立って援助のあり方を考察した論考。支配における同意の側面に注目したネオ・グラムシアンへのヘゲモニー論に立脚して「グッド・ガバナンスの普遍的価値化」や「民主化政策をめぐる政治的コンディショナリティ」を解釈するなど大理論の応用意欲が高いのがよい。ただカンボジアが民主化の押し付けによって反動化した事実があるにせよ、政治的コンディショナリティ抜きでの中国型支援の肯定も難しいため、もう一段掘り下げた考察が欲しかった。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 4 年次

吉野 百香



「ドイツの初等教育科目 **Sachkunde** からみる環境教育の在り方」

環境教育の充実したドイツ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の環境に関する初等教育科目 (**Sachkunde**) について、導入の背景や教育政策の中での位置づけ、実際のカリキュラムや教育内容等を丁寧に紹介している。また **ESD** との関連についての目配りや日独の教科書を比較しての **Sachkunde** の特徴の描出など、手堅く考察を進めていくあたりも良い。**Sachkunde** 経験者に対するインタビューも含め、具体的な面で教育関係者に裨益する情報と考察が多い。独創性あふれる類の論考ではないが、一読する価値のある有益性を持つ点で非常に高く評価できる。

以上

世界問題研究所長 岩本 誠吾

同研究所員 中谷 真憲

同研究所員 久保 秀雄

〈その他の応募作〉

■現代社会学部現代社会学科 4 年次

阿部 奏音

「『お口の健康』から健康寿命へ～ベトナムにおける口腔衛生への意識～」

■文化学部国際文化学科 1 年次

石井 陽也

「今日の世界問題 精神障害による自殺対策をするにはどうすべきか——精神科医と宗教家の協力」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

礒谷 美乃加

「脱炭素社会におけるカーボンプライシングの有効性について～EUの政策を中心に～」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

岩崎 泰輝

「北アイルランド紛争から見るテロリズムと民族問題について」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

奥村 力斗

「ウクライナ戦争下における教育の後退—『人間の安全保障』の観点からの考察—」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

澤岬 杏吏

「福祉国家フィンランドにみる持続可能な社会の構築に向けた取り組み—フィンランドがSDGsの各分野を達成しつつある社会・経済的要因は何か?—」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次生

谷口 明泉

「日本において地熱発電が普及するための解決しなければならない課題は何か?」

■現代社会学部現代社会学科 3 年次

中田 大賀

「世界問題としての新自由主義的潮流と福祉国家への支持—アメリカと日本のデータの分析—」

■現代社会学部現代社会学科 4 年次

日置 七緒

「『変革のシルエット』～ベトナム女性の伝統衣装アオザイから考える社会的情勢とボディイメージの関係性～」

■国際関係学部国際関係学科 3 年次

松澤 健

「海洋進出新主体としての中国海警局—『沿岸警備隊』の台頭を読み解く—」

■国際関係学部国際関係学科 4 年次

道井 知真

「『日本防衛協力の選択肢』—国際安全保障のステークホルダーとしての日本—」

■国際関係学部国際関係学科 1 年次

南 怜那

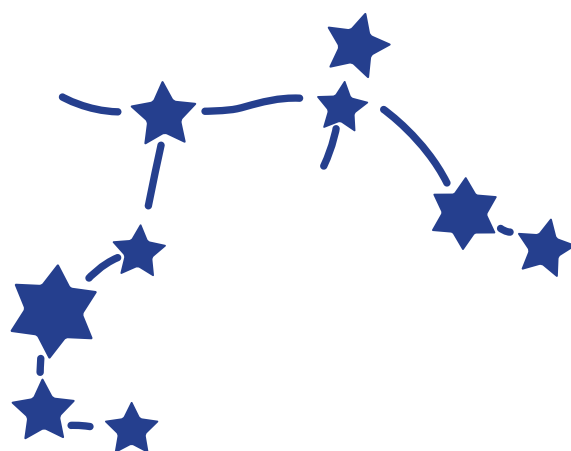
「性と自己の確立—同性婚を世界の事例とともに考える—」

※区分ごとに氏名の 50 音順

若泉敬記念基金について

若泉 敬（わかいすみ けい 1930–1996 年）は国際政治学者。東京大学法学部を卒業し、ロンドン大学やジョンズ・ホプキンス大学に留学。1966 年に本学教授として招聘され、同年世界問題研究所所員となり、1970 年から 1980 年まで同研究所所長を務める。1992 年退職時には退職金の全額を同研究所の活動資金として寄付。同研究所では 2001 年にこれを「若泉敬記念基金」と命名。若者の教育に熱心だった若泉教授の精神を学生に伝承するため、講演会開催、懸賞論文募集などの経費に充てている。





京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第12号 2024年7月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所所員 久保 秀雄／同事務局 藤本 興子

印刷 中西印刷株式会社
